

## 第26回名古屋大学博物館特別展記録 「名古屋大学による遺跡調査からみる人類史」

Record of the 26th special exhibition at Nagoya University Museum  
“From Africa to Higashiyama campus: Human history through archaeological  
field work by Nagoya University”

門脇 誠二 (KADOWAKI Seiji)・宇治原 妃美子 (UJIHARA Kimiko)・  
梅村 綾子 (UMEMURA Ayako)

464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学博物館

Nagoya University Museum, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601, Japan

### 1. はじめに

本稿は、名古屋大学博物館において2020年度に開催された第26回特別展「名古屋大学による遺跡調査からみる人類史」の記録である(図1)。本展は、名古屋大学で行われてきた様々な考古学研究を一般に発信することが目的であった。また、名古屋大学に収蔵される考古資料を展示することによって一



図1 第26回名古屋大学博物館特別展の様子(導入部分)。

般に紹介し、それが今後、学内外で幅広く活用されることを期待して展示を開催した。この特別展の記録として、まず開催の概要を示し、次に展示パネルを転載する。そして最後に関連企画の内容を記す。

## 2. 展示開催の概要

会期：2020年9月8日（火）～2021年4月10日（土）

※当初は2020年3月17日（火）～9月26日（土）を予定していたが、新型コロナ禍のために会期を遅らせた。

会場：名古屋大学博物館3階展示室

主催：名古屋大学博物館

共催：名古屋大学考古学研究室、名古屋大学高等研究院

企画立案と展示品準備は門脇 誠二が行い、展示デザインや関連企画の運営を宇治原 妃美子と梅村 綾子が行った。展示品は、2019年に名古屋大学人文学研究科考古学研究室から博物館に移管された考古資料が中心であるが、一部は名古屋大学考古学研究室と豊田市教育委員会から借用した。展示チラシはA3サイズを2つ折りにしたもので、見開きで展示内容が一覧できるようにした（図2）。

展示解説には、考古遺跡の調査を行っている名古屋大学教員および大学院生から協力を得た（次に列挙）。人文学研究科考古学研究室（山本 直人教授、梶原 義実教授、伊藤 伸幸助教、市川 彰 特任助教）、高等研究院（周藤 芳幸教授・研究院長、河江 肖 准教授）、理学研究科（森島 邦博 准教授、榊原 亜美）、博物館（新美 倫子 准教授）。



図2 第26回名古屋大学博物館特別展のパンフレット（見開き部分）。

展示で用いた画像の一部やVRは、次の機関から提供をいただいた。愛知県陶磁美術館、愛知県埋蔵文化財センター、阿智村教育委員会、NHK制作局第3制作ユニット科学「コズミックフロント☆NEXT」班、宮治昭名古屋大学名誉教授。

また、展示品として用いた考古資料の整理には、名古屋大学博物館のRA（渡邊綾美）・大学院生（廣瀬允人、須賀永帰、村松裕南、大澤桃子）、人文学研究科考古学研究室の教員・在学生・OBの方々から協力をいただいた。

### 3. 展示内容

以下、展示内容の記録として、展示パネルの解説文を転載する。先述したように解説文の作成には名古屋大学の関連教員から協力を受けたので、それぞれの執筆者を記す。

#### 3.1. ごあいさつ

名古屋大学博物館の第26回特別展「アフリカから東山キャンパスまで：名古屋大学による遺跡調査からみる人類史」にお越しいただきありがとうございます。名古屋大学では、700万年におよぶ人類史を明らかにするための様々な研究が行われていますが、その研究標本を集める方法の1つである「遺跡調査」が今回のテーマです。遺跡にも色々な種類があります。数万年前の狩猟採集民のキャンプ跡や、農業が始まってからの集落、上層階級が作った古墳やピラミッド、寺院などの宗教施設、また、土器や陶磁器を焼いて作った窯跡<sup>かまあと</sup>などの工房跡もあります。

人類が誕生したアフリカの遺跡から東山キャンパスの古代遺跡まで、名古屋大学は70年以上にわたり国内外の150以上の遺跡を調査してきました。また、遺跡研究のために人文学と理学をまたぐ多様な分析が行われているのも名古屋大学の特徴です。多岐にわたる遺跡研究の軌跡と最前線を感じていただけたら幸いです。

展示されている資料の多くは、2019年に名古屋大学人文学研究科考古学研究室から博物館に移管された考古資料です。主に東海地方西部の旧石器時代から中世までの200遺跡ほどから集められた土器や陶磁器、石器、骨など、約550箱が移管されました。これらの遺跡の多くは他大学や各地の教育委員会・埋蔵文化財センターによっても調査されており、同じ遺跡の資料が各地の教育・行政機関や博物館・資料館にも保管されています（こうした関連機関の数は90ほどありそうです）。

名古屋大学博物館は、大学内外のみなさまに幅広く活用されることを目指しています。移管された考古資料につきましても、大学内外での教育研究に活用されるために、これから整理と公開を進めていく予定です。本展示がその最初の機会となれば幸いです。

名古屋大学博物館  
館長 大路樹生

### 3.2. 名古屋大学が調査に携わった遺跡：1948年～2020年（図3）

名古屋大学が携わった遺跡調査の数は国内外の150以上で、そのはじまりは1948年にさかのぼります。それから70年のあいだ、国内では主に愛知県と岐阜県、北海道の遺跡調査を通して、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・平安時代～中世にわたる歴史が研究されました。ここ東山キャンパスでも古代遺跡（古代の窯跡）の調査が行われています。

海外では、東アフリカやエジプト、西～中央アジア、メソアメリカにおいて、人類の進化や農業の起源、古代文明、ヘレニズム文化、仏教美術に関する遺跡の調査が行われてきました。

執筆：門脇 誠二（名古屋大学博物館）



図3 名古屋大学が調査に携わった遺跡の解説パネル。

### 3.3. アフリカの遺跡調査からわかる 人類と文化の進化 (図4)

アフリカは人類が進化した主要な舞台で、私たち人間のルーツをたどることができます。名古屋大学考古学研究室（大参 義一 助手，当時）は1968年から1980年代にかけてケニアやタンザニアにおいて石器時代の遺跡調査を行いました。アフリカでの遺跡発掘は様々な点で実施が難しく、日本人が主体となる調査はとても希少です。ここに展示されている石器は、日本にはほとんどない貴重な標本として、教育研究に活用されています。

30万年以上前～5万年ほど前の遺跡から、当時の人類が使った石器（石製の刃物）が見つかりました。30万年以上前の石器は大型の肉切り包丁です（ハンドアックスとクリーバー）。それを使った原人は、動物を解体して肉など高カロリーの食べ物をたくさんとるようになり、脳の拡大が促進されました。5万年ほど前の石器は小型化しました。先が尖った石器は矢の先端などにつけられ、動物を狩る武器として当時最新の道具でした。私たちと同じ現生人類（ホモ・サピエンス）が開発しました。

執筆：門脇 誠二（名古屋大学博物館）



図4 アフリカの遺跡調査の展示。

### 3.4. ヨルダンの遺跡調査からわかる ホモ・サピエンスの特徴 (図5)

ヨルダンが位置する西アジア(中近東)は、私達ホモ・サピエンスがアフリカからユーラシア大陸へ拡散した出発点でした。また、ヨーロッパから西アジアへ拡散したネアンデルタール人と共存し交雑もあったといわれています。しかしネアンデルタール人は絶滅し、ホモ・サピエンスのみが生存して今に至ります。両者の命運を分けた要因は何だったのでしょうか? その謎を明らかにするために、当時の人々が暮らした岩陰に残る遺跡の調査を名古屋大学が行っています(門脇 誠二 講師 名古屋大学博物館、環境学研究科)。

ネアンデルタール人は優れたハンターで、大きく立派な石槍を用いてウシやシカなどの成獣をねらって狩猟していました。同じような石槍をホモ・サピエンスも最初は使っていましたが、4万年前頃に石器が小型化しました。幾つかの小さな石器を組み合わせて新しい道具を作ったり、飛び道具の先端部として用いたりしました。また、ウサギやリスなど小型動物の利用が増加し、装飾品の流通も増えました。気候変動などに起因する食料減少に応じて道具技術や狩猟行動を変え、社会ネットワークを発達させたと考えられます。

執筆: 門脇 誠二 (名古屋大学博物館)



図5 ヨルダンの遺跡調査の展示。

### 3.5. 名古屋大学による縄文時代の調査と研究（図6）

名古屋大学は1950年から1968年にかけて東海地方を代表する旧石器時代～縄文時代の遺跡の発掘調査を行いました。太平洋戦争後、間もない頃であったため、発掘調査を実施できるのは大学や国立文化財研究所に限られており、名大は地元の研究者や教育委員会の協力を得て実施しました。高度経済成長期以降、国土開発に伴う大規模な発掘調査を都道府県の教育委員会が担当するようになり、大学が発掘調査で果たす役割は小さくなっていきました。

後期旧石器時代（38,000～15,600年前）から縄文時代（15,600～2,500年前）に移行する時期の遺跡から石器や土器が発見されました。日本史では土器の有無を基準に時代を区分しており、土器が出現してからの縄文時代と呼んでいます。豊田市酒呑ジュリナ遺跡から縄文時代でもっとも古い時期の隆線文土器が見つかり、それらの年代はおおよそ14,000年前です。その頃の深鉢形の土器は煮炊きに用いられ、食物調理の発達をうながしたと考えられています。

執筆：山本 直人（名古屋大学人文学研究科考古学研究室）



図6 縄文時代の遺跡調査の展示。

### 3.6. 北海道の調査からわかる 北の縄文人の暮らし (図7)

北海道は気候が寒冷なために縄文文化の限界地域です。ここより北では寒さのため、縄文人たちの生活様式では暮らせません。この地域の縄文人たちは、わずかな環境の変化でも、それまで持っていた技術では生活できなくなる可能性があり、つねにさまざまな工夫をこらしていたと思われます。名古屋大学は2006～2018年にこの地域で縄文時代の遺跡の分布状況を調べ、発掘調査を行いました(名古屋大学博物館 新美 倫子 准教授)。この調査や研究を通して、縄文人たちの技術や工夫が明らかになってきました。

海辺の縄文時代の遺跡からは、たくさんの海獣の骨や人々が使った石器・土器が見つかりました。アシカ・トド・オットセイやイルカ類などの海にすむ哺乳類を「海獣」とよび、これらの中でもイルカ類は本州でも北海道でも行われますが、アシカ・トド・オットセイをさかんに捕獲するのは、北海道だけの特徴です。海獣からは食べものとなる肉や多くの脂肪だけでなく、道具や衣服の材料も手に入りました。

執筆：新美 倫子 (名古屋大学博物館)



図7 北海道の縄文遺跡の展示.

### 3.7. 土器の多様性からわかる 弥生文化の始まりと終わり (図8)

縄文から弥生そして古墳時代への変化はどのように進行したのでしょうか？ 平成から令和のように明確な区別があったわけではありません。弥生時代の頃に朝鮮半島から人々や新たな文化（稲作や土器、金属器など）が流入したのは周知の通りですが、それらが日本列島の縄文社会に受け入れられていったプロセスは地域ごとに多様だったことが各地の遺跡調査から明らかになってきました。

名古屋大学考古学研究室は、名古屋とその周辺における弥生時代の遺跡調査を行ってきました。その中には朝日遺跡や高蔵貝塚、西志賀遺跡、大地遺跡など、当地の弥生文化研究において鍵となる遺跡が含まれます。例えば朝日遺跡の貝殻山貝塚では弥生時代前期の地層が調査され、大陸起源の文化が先に浸透した西日本の影響を受けた遠賀川系土器と共に、縄文時代から続く在来の条痕文系土器が共存する状況が明らかになりました。名古屋大学は、こうした新旧の土器様式の共存と変化を分析し、この地域における縄文から弥生そして古墳時代にかけての文化変化を明らかにする研究の基礎を築きました。

執筆：門脇 誠二（名古屋大学博物館）



図8 弥生時代の遺跡調査の展示。

### 3.8. 古墳・須恵器窯・集落の調査からわかる 古墳時代の社会（図9）

死者を埋葬する行為は5万年前までにネアンデルタール人も行っていましたが、私達ホモ・サピエンスの祖先はその頃、墓に赤い顔料をまいていました。何らかの意味が込められていたかもしれません。その後、世界中に拡散したホモ・サピエンスは各地で副葬品や埋葬儀礼を発達させ、やがては墓を巨大化してモニュメントにしました。古代文明で著名なピラミッドや王墓だけでなく、土や石を積んだ大型の墓は新旧両大陸に広くみられ、マウンドやケルン、ドルメンなどと呼ばれています。日本の古墳はその一種です。

名古屋大学は愛知県と岐阜県南部の10地点ほどで古墳の調査をしました。大垣市の遊塚古墳群では前方後円墳1基と円墳2基が調査され、古墳時代中期（5世紀）のものと考えられています。大垣市の牧田古墳群では、古墳時代後期～終末の群集墳（小型古墳の集中）が発掘され、たくさんの須恵器などが副葬品として見つかりました。須恵器は専門集団によって穴窯で焼かれて作られましたが、その工房址も調査されました（東山キャンパスにもあります）。

また、古墳時代の人々が暮らした村の遺跡として、知立市の荒新切遺跡が名古屋大学によって発掘され、住居の跡などが見つかりました。この遺跡では土師器とよばれる素焼きの土器が多く使われていましたが、弥生土器から土師器へ変化した過程についても研究されました。

執筆：門脇 誠二（名古屋大学博物館）



図9 古墳時代の遺跡調査の展示。

### 3.9. 東山キャンパスにおける古代窯跡の発掘（図10）

東山キャンパスにも古代遺跡があるのをご存知でしょうか。その遺跡は、古墳時代後期（飛鳥時代）の6世紀中頃から平安時代後半の11世紀後半のものです。いずれも、土器や陶器を焼いた窯の跡になります。これらの窯跡は、名古屋市東部～豊田市西部におよぶ猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）の一部になります。猿投窯の遺跡群は、愛知用水の建設に先立って名古屋大学が1955年から調査したのですが（隣の展示コーナーをご覧ください）、その一部が東山キャンパスにも広がっていました。

猿投窯では、古墳時代に大陸から日本に伝わった須恵器（高温で焼き締めた硬く丈夫なやきもの）の生産が早くに始まりました。その後、現在の陶磁器のように表面がガラス質になる釉薬を用いた陶器生産が盛んになりました。須恵器も陶器も、それ以前の土器とは異なり、斜面に築かれたトンネル状の穴窯で焼かれたのが特徴です。東山キャンパスの一带は斜面が多く、燃料となる木材も豊富なので、穴窯に適した場所だったというわけです。

名古屋大学東山キャンパス構内では、約20基の窯跡が確認され、近年、下記の4基の窯跡について発掘調査が行われています。

#### 東山114号窯

11世紀後半（平安時代後半）の窯跡で、灰釉陶器から山茶碗への移行期にあたります。2003年1月、野依学術交流会館の建設に伴い、灰層の調査を行いました。

#### 東山61号窯

6世紀中葉（古墳時代後期）の須恵器の標式窯（編年の基準とされる窯）として知られます。2003年11月、理系中華食堂（現ブックスフロンテ）の改築工事に伴い、遺跡の範囲確認のための調査を行い、灰層の広がりを検出しました。また61号窯灰層の下層より、6世紀前半の東山39号窯の灰層を確認しました。

#### 東山118号窯

考古学研究室による発掘調査実習として、2010年～2013年に東山61号窯の西側隣接地の発掘調査を行いました。61号窯とは異なる7世紀前半（古墳時代後期）の須恵器を含む灰層を確認しました。

#### 東山72号窯

10世紀後半（平安時代中頃）の灰釉陶器の標式窯として知られます。2014年～2015年の発掘調査実習として、この窯跡の実態を確認するために発掘調査が行われました。窯体・灰層など遺構の痕跡は確認できなかったものの、後世の整地土層中より多くの遺物が出土しました。

執筆：梶原 義実（名古屋大学人文学研究科考古学研究室）



図10 (a) 名古屋大学東山キャンパスの遺跡調査の展示, (b) 東山72号窯出土遺物 (平安時代中期) の展示.

### 3.10. 愛知用水事業から生じた猿投窯の調査 (図11)

愛知用水は岐阜県八百津町から愛知県南知多町に至る大規模な用水で、その幹線水路の総延長は112 kmにおよびます。1957年に着工され1961年に完成したのですが、それに先立つ1955年から、用水工事によって失われてしまう遺跡の調査が行われていました。調査主体は愛知県教育委員会で、名古屋大学文学部の澄田 正一 教授と榎崎 彰一 准教授（いずれも当時）をはじめとする名古屋大学考古学研究室が全面的に協力しました。

この時に調査された主な遺跡は、古代から中世にかけて陶器を焼いた窯跡（古窯）です。その存在を最初に指摘したのは、企業家で陶芸家でもある本多 静雄氏です。名古屋大学による調査では、窯跡の詳細な分布が記録され、7年間で50基以上の窯跡の発掘がおこなわれました。これらのたくさんの古窯群に対して、「猿投窯（猿投山西南麓古窯址群）」という名称が澄田氏によってつけられました。

調査で収集されたたくさんの陶器などが分析され、飛鳥時代から平安時代にわたる猿投窯の須恵器・灰釉陶器の編年が榎崎氏によって示されました。この編年案は、その後の調査研究によって幾度かの修正を経ることになりますが、東海地域の窯業編年をはじめて示したのものとして、高い学術的価値をもちます。

執筆：梶原 義実（名古屋大学人文学研究科考古学研究室）



図11 猿投窯の調査の展示.

### 3.11. 東山道の祭祀遺跡（図12）

名古屋大学考古学研究室が調査した遺跡の中でも特殊なのが、古代東山道ぞいの遺跡です。東山道とは、古墳時代～古代の畿内にあった中央政権が、地方の支配を強めるために整備した官道の1つです。調査された遺跡は、現在の岐阜県中津川市と長野県下伊那郡阿智村を結ぶルート上にありました。岐阜県側（木曾川水系）の遺跡が山畑遺跡で標高450 mの地点です。そこから長野県側（天竜川水系）へ行くためには、険しい山道を上り、中央アルプス南端の恵那山と富士見台のあいだの峠を越える必要があります。この峠に残されたのが神坂峠遺跡（標高約1,600 m）です（調査団長は國學院大學の大場 磐雄 教授）。

山畑遺跡と神坂峠遺跡は、険しい山道を通らなければならなかった人々が旅の安全を祈る場所だったと考えられています。神坂峠遺跡では石を積んだり敷いたりした場所があり、山畑遺跡には大きな岩が集中する場所がありました。その周りからは、石製模造品や土器がたくさん見つかりました。

石製模造品は様々な石製品の総称で、鏡や刀、剣や斧などを模倣したミニチュア製品のほか、管玉や勾玉、白玉というビーズのような装飾品があります。いずれも実用品ではなく、古墳への副葬品としてもみつまっていることから、祭祀具と考えられています。それ以外に、たくさんの土器や陶磁器もみついています。これらも捧げものだったのかもしれませんが、屋外の祭壇に長年のあいだ風雨にさらされていたためか、とても小さな破片になってしまっています（捧げる儀式として意図的に壊されたともいわれています）。

東山道は交易路としても機能するようになり、畿内や尾張、美濃で早くから発達した須恵器や灰釉陶器が東国へ運ばれました。こうした交易路としての側面は「瓷器の道」とも呼ばれています（名古屋大学の植崎 彰一 教授による）。

執筆：門脇 誠二（名古屋大学博物館）



図12 古代東山道の祭祀遺跡調査の展示。

### 3.12. 古代日本における寺院の普及プロセスをさぐる：伊保廃寺の発掘調査（図13）

古墳時代の後半（飛鳥時代）に仏教が日本へ伝来しました。その後、奈良時代にかけて国家事業として畿内や各地に仏教寺院が建立されたことも広く知られていると思います。法隆寺のように現在まで続く寺院もありますが、廃棄されてしまった寺院は「廃寺」と呼ばれる遺跡になりました。これらの廃寺遺跡も名古屋大学によって調査され、古代日本における仏教寺院の普及プロセスについて、歴史書だけでは分からない側面が解明されてきました。

名古屋大学考古学研究室は、2017年度から文部科学省科学研究費補助金を受け「古代における谷底平野および周辺丘陵部の開発と宗教施設の展開に関する研究」というプロジェクト（代表：梶原 義実）の一環として、豊田市の伊保廃寺遺跡（伊保古瓦出土地）の実態を知るための学術調査を行っています。

この遺跡は豊田市保見六反田に位置します。伊保川が東西方向に流れる谷の南縁に位置しており、遺跡の南側には丘陵が迫っています。1970年、伊保川の付け替え工事の際に古瓦が出土したことから、豊田市教育委員会による発掘調査がおこなわれましたが、寺院跡と断定できる遺構は検出できませんでした。

2019年度の発掘調査では、地山を削り出してその側面に瓦を立て並べて基壇を構築した痕跡および、その外側に白色の粘質土等を盛って基壇を拡張し、その端部には小礫を詰めた溝を巡らせている状況が確認できました。詳細な評価は2020年度以降の調査に期待したいと思いますが、古代寺院の基壇の可能性が高いと現状では考えています。

執筆：梶原 義実（名古屋大学人文学研究科考古学研究室）



図13 古代の寺院遺跡（伊保廃寺）調査の展示。

### 3.13. パーミヤーンの仏教美術の歴史 (図14)

名古屋大学は海外の仏教遺跡も調査しました。アフガニスタンのヒンドークシ山脈にあるパーミヤーン遺跡です。この遺跡は、奈良の大仏を超える大きさの仏像2体とたくさんの仏教壁画などから世界的に有名で、ユネスコの世界遺産に登録されています。パーミヤーンは、西遊記で知られる三蔵法師が7世紀に訪問し、当時の大仏の様子が『大唐西域記』に書かれています。しかしそれ以外の文書記録がほとんどなく、壮大な仏教美術が作られた時代や経緯、社会について謎のままです。

パーミヤーンの遺跡調査は19世紀にイギリスによって始められ、20世紀にはフランスやアメリカ、イタリア、ドイツも加わりました。日本からは名古屋大学、京都大学、成城大学が調査隊を派遣しました。名古屋大学は1964年と1969年に調査を行い、壁画や塑像の美術史研究や石窟の建築史研究が行われました(当時の文学部の柏瀬 清一郎 助教授と工学部の小寺 武久 助教授が団長、後の文学研究科の宮治 昭 教授は当時大学院生)。これらは、タリバン政権による2001年の遺跡破壊よりも前に残された貴重な記録や研究になります。

遺跡破壊の後の調査や保存活動にも日本は積極的に参加しました。名古屋大学博物館と年代測定研究センターは、東京文化財研究所と提携し、仏教壁画の放射性炭素年代測定を行いました。

執筆：門脇 誠二 (名古屋大学博物館)



図14 アフガニスタンの仏教遺跡 (パーミヤーン) 調査の展示。

### 3.14. ヘレニズム時代エジプト領域部の暮らしに迫る：アコリス遺跡とその周辺（図15）

ヘレニズム時代と呼ばれる紀元前の最後の3世紀間、エジプトのナイル川流域では、ギリシア系のプトレマイオス王朝の支配のもとで、新来のギリシア文化と伝統的なエジプト文化とが混淆する独自の文明世界が展開していました。1981年から40年にわたって日本隊が発掘を続けている中エジプトのアコリス遺跡でも、名古屋大学（周藤 芳幸 教授、人文学研究科、高等研究院長）を中心とする調査チームによって、この時代の人々の暮らしに迫るための様々な新たな手がかりが発見されています。

都市域北端部の石材加工場で行われた発掘では、エーゲ海やイタリア南部から運ばれてきたワイン輸送用の壺（アンフォラ）の破片が数多く出土し、地中海から400 kmもナイルをさかのぼった中エジプトにも、ギリシアの文化が及んでいたことが明らかになりました。また、この時代の採石場の調査では、当時の人々が岩の表面にギリシア語とデモティック（エジプト語の民衆文字）で書き残したたくさんの記録（グラフィティ）が確認され、人々がどのように働いていたのかが明らかになりつつあります。

執筆：周藤 芳幸（名古屋大学人文学研究科西洋史学研究室・高等研究院）



図15 古代エジプト、ヘレニズム時代の遺跡（アコリス）調査の展示。

### 3.15. 7基のピラミッドの3D計測調査と建造研究 (図16)

古代エジプトでは、初期王朝末期から古王国時代（紀元前2592～2120年頃）にかけて、70基を超える巨大なピラミッドが、メンフィス地区に造営されました。近年、これらのピラミッドでは多面的な研究調査が推進されています。それらは隣接する都市遺構の発掘データ、パピルス文書や労働者の残した落書きなどの文字資料、地形や土壌調査による周囲の環境データなど、様々なデータからなっています。

しかしその一方で、ピラミッドのそのものの形状のデータは、1960年以降ほとんど更新されていません。名古屋大学の調査チームは、データの包括的なアップデートを試みるべく、2013年よりオープンイノベーション・プロジェクトを推進し、それまで困難だったエジプトのピラミッド群の3Dデータを取得と解析を行っています（河江 肖剰 准教授，名古屋大学高等研究院）。現在まで、主要な7基のピラミッドの調査を完遂し、内部の組構造と技術変化の通史的な研究から、ピラミッド時代のイノベーションについて明らかにしようとしています。

執筆：河江 肖剰（名古屋大学高等研究院）



図16 古代エジプト，ピラミッドの3D計測調査の展示。

### 3.16. ScanPyramids (図17)

ScanPyramidsは、エジプト、日本、フランス、カナダの国際共同研究でエジプトのギザにあるクフ王・カフラー王、ダハシュールにある屈折・赤の4つのピラミッドを最新の科学技術を用いて非破壊で調査する目的で2015年に発足しました。このプロジェクトの中で森島 邦博 特任助教をはじめとする名古屋大学F研究室は、宇宙起源の放射線である宇宙線を活用したピラミッド内部の非破壊イメージングを行っています。宇宙線は、絶えず地表に降り注ぎ、最大で数km級の構造物を貫通することができるため、X線レントゲン撮影と同じように巨大なピラミッドの内部を可視化することができます。

私たちは、この技術がピラミッドの調査に有用であることを確認するため、屈折ピラミッドの下部玄室から観測を行い、既知の空間である上部玄室の可視化に世界で初めて成功しました。更に、クフ王のピラミッドで観測を開始し、2016年には下降通路の上方に未知の空間を、2017年には大回廊の直上に巨大な新空間を発見しました。この成果は世界的に権威のある学術論文誌の一つであるNatureに掲載されました。現在、観測地点を増やし、発見した空間の詳細な形状を明らかにするための解析を進めています。

執筆：森島 邦博 (名古屋大学理学研究科)



図17 宇宙線によるピラミッド測量プロジェクト (ScanPyramids) の展示。

#### 4. 関連企画

本展示の関連企画として、1) スポット展「オルメカ・マヤの拓本展：メソアメリカの権力と暦」、2) サテライト展示、3) 展示内容のウェブ紹介、および4) オンライン講演会を開催した。下記にその概要を示す。

##### 4.1. オルメカ・マヤの拓本展

第26回特別展と同時期に隣の展示室で開催し、オルメカ文明とマヤ文明の遺跡から出土した石彫の拓本9点を展示した（図18）。いずれも、人文学研究科考古学研究室の伊藤 伸幸 助教による製作品である。その内容として、あいさつ文と解説文を転載する。

##### ごあいさつ

メソアメリカという言葉はご存じでしょうか？ アメリカ大陸で興った文明の1つです。「メソ」は「中間の」もしくは「中央」という意味があり、アメリカは新大陸のことを指します。メソアメリカは南北アメリカの中間にあり、中央アメリカもしくは中米を指しています。そして、メソアメリカ文明とは、南北アメリカ大陸で興った2大文明のうちでより北にある古代文明です。みなさんが食べているチョコレート原料のカカオ、野菜のトマト、アボカドなどを世界で初めて栽培化した文明です。

今回の展示では「メソアメリカの権力と暦」というテーマに焦点をあてています。名古屋大学が1994年から現在まで行ったメソアメリカ考古学調査の成果の一部を紹介します。本展示では、メソアメリカ文明のうちで、文字や暦を石碑や祭壇石に彫ったオルメカ文明とマヤ文明の拓本資料をご覧になれます。石碑や祭壇石は、古代メソアメリカ文明のピラミッド神殿前に権力の象徴として建立され、当



図18 同時開催スポット展「オルメカ・マヤの拓本展」の様子。

時の権勢を誇った支配者がその事蹟を彫りこんだ石です。

また、2018年3月に名古屋大学の調査で発掘されたメソアメリカで最も古い日付を刻んだ新発見の石碑の拓影もご覧になれます。今回は本邦初公開となります。古代メソアメリカ文明の息吹を感じただけだと幸いです。

執筆：伊藤 伸幸（名古屋大学人文学研究科考古学研究室）

### 名古屋大学による古代メソアメリカの調査と石彫

メソアメリカは人類が新大陸に進出し、築いた2大文明のうちの一つです。また、旧大陸の4文明とは異なる発展をしました。名古屋大学は1994年から現在に至るまでメソアメリカ（中央アメリカ）において石彫調査や発掘調査を実施してきました。また、2018年3月にはアメリカ大陸の暦で最も早い日付を持つ石碑が本学の調査で発見されています。ここに展示している拓本は、メソアメリカ地域でも希少な石彫資料です。

メソアメリカでは、紀元前1,000年前後から石彫がつくられるようになりました。当初は写実的な動物やヒトを3次的に表現していました。その後、石碑に浮彫りや線刻で神話的な内容を表現しています。文字や暦が発明されると、神話よりは権力者の事蹟を石碑に刻むようになります。文字は象形文字から音節文字に発展し、数字は20進法で記録されています。また、後代、王様を浮き彫りし、即位、逝去、戦の勝利など歴史的な事柄を記録するようになりました。

執筆：伊藤 伸幸（名古屋大学人文学研究科考古学研究室）

### 4.2. サテライト展示

名古屋大学東山キャンパス内の遺跡（窯跡）の紹介を促進するために、遺跡から出土した遺物（須恵器や陶器）を現地付近に展示した（図19）。環境総合館には、付近の東山61号窯の出土遺物を展示した。生協ブックスフロント店内には、付近の東山72号窯の遺物を展示した。そして野依記念学術交流館には、その場所にあった東山114号窯から出土した遺物を展示した。同時に、東山61号窯の遺跡案内板が人文学研究科考古学研究室の梶原 義実 教授によって設置された。生協ブックスフロントと野依記念学術交流館のサテライト展示は、特別展の後にも継続して設置されている。

### 4.3. 展示内容のウェブ紹介

冒頭で述べたように、本展の開催は新型コロナ禍のために半年ほどのあいだ遅れた。また、開催した後も断続的に感染拡大に応じて閉館することがあった。そこで、展示風景の写真と簡単な解説文を名古屋大学博物館のウェブやソーシャル・ネットワーキング・サービスのTwitterに掲載し、自宅からでも展示内容の一部を知ることができるようにした。この展示紹介は、会期終了後も次のURLで掲載している（2021年8月現在：<http://www.num.nagoya-u.ac.jp/docs/200317pics.pdf>）。

### 4.4. 展示関連講演会

展示関連講演会として、当初2020年4月から7月までのあいだに3回の講演会を予定していたが、新型コロナ禍のために中止となった。そこで代替企画として、名古屋市教育委員会との連携によるウェブ上での講演会「オンライン キャンパス講座」を2020年10月～2021年2月のあいだに4回行った（次ページ参照）。その結果、4回でのべ644名の参加者があり、その数は通常の対面講演会よりも多かった。

## 名古屋大学東山キャンパス内

# サテライト会場展示のご案内

東山キャンパスの窯跡の現地付近に、遺跡案内板・案内パネルを設置し、期間限定で出土遺物の一部を展示公開しています。本展示とあわせて、現地もぜひご覧ください。



図19 サテライト展示の案内チラシ (展示場所を示した部分を抜粋).

第1回 2020年10月10日(土)

「臨床考古学と基礎考古学－名大考古学講座の歩みから」

講師 山本 直人 教授 (名古屋大学人文学研究科考古学研究室)

第2回 2020年11月28日(土)

「地域と連携する名大考古学－愛知用水から伊保廃寺、さらにその先へ」

講師 梶原 義実 准教授 (名古屋大学人文学研究科考古学研究室)

第3回 2021年1月16日(土)

「7基のピラミッドの3D計測調査と建造研究」

講師 河江 肖剰 准教授 (名古屋大学高等研究院)

第4回 2021年2月6日(土)

「名古屋大学によるアフリカと西アジアの旧石器遺跡調査」

講師 門脇 誠二 講師 (名古屋大学博物館)